

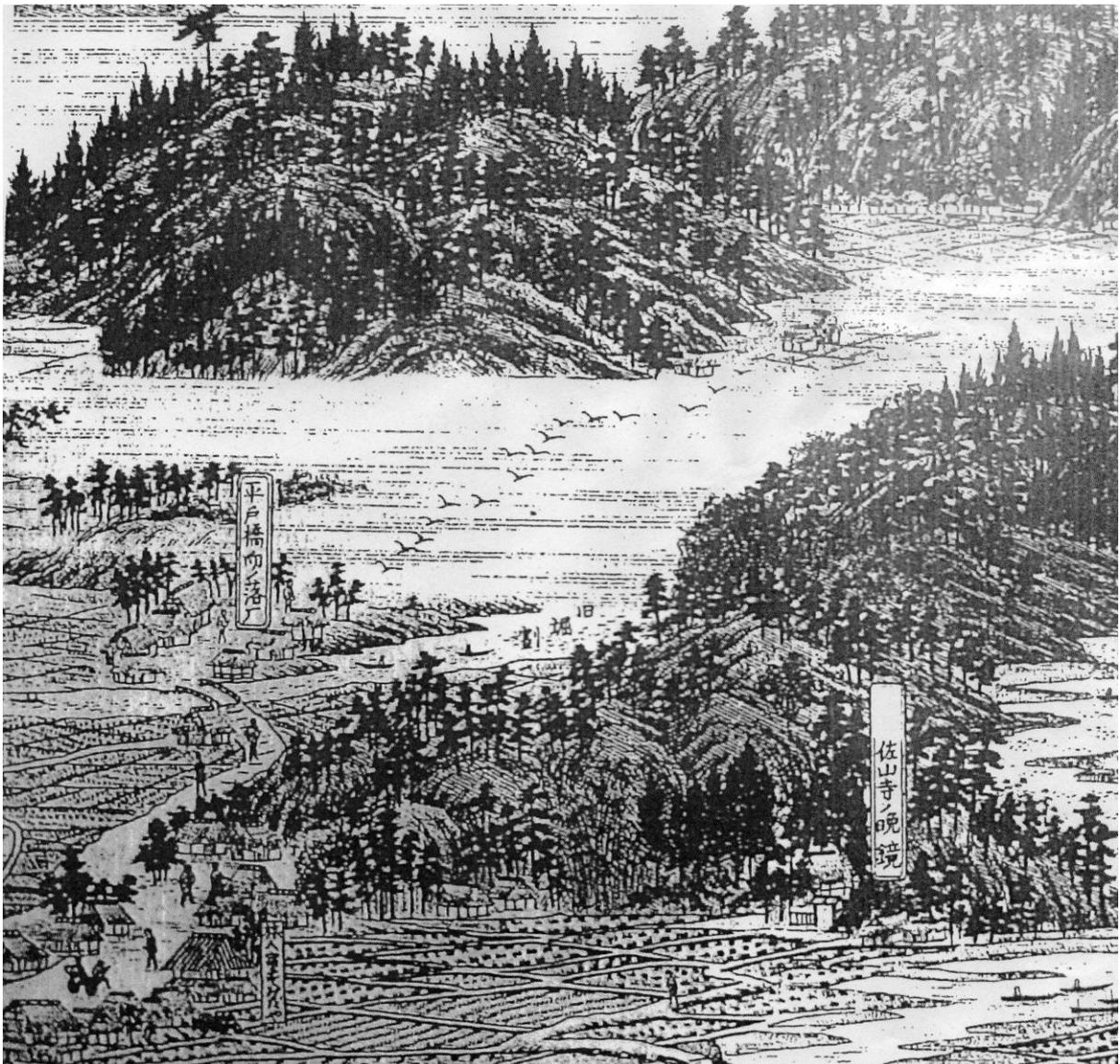
八千代市郷土歴史研究会  
会長 村田一男  
事務局 八千代市勝田台3-24-10 牧野方

八千代市民文化祭 ふるさとの歴史展  
「旧村のいま・旧平戸村のすがた&  
大和田新田拾遺」

と き : 11月29日(土) 午後1時~5時  
30日(日) 午前9時~午後4時  
ところ : 勝田台文化プラザ 2階展示室

大和田新田と平戸村研究から、八千代工業団地の発展、3領主に支配された平戸村、発掘された平戸台8号墳など両村の新発見を紹介します。

展示解説は両日とも 午後2時から  
『史談八千代』第33号も当日発刊



銅版画に描かれた印旛沼(平戸付近に「旧掘割」とある 明治27年)「印旛八景 鳥羽小左衛門閑居千玉堂之図」『日本博覧図 千葉編』

今年の研究テーマは、旧大和田新田の総合研究（特集1）と旧平戸村の総合研究（特集2）の二つです。

特集1の旧大和田新田は原則的に2年の研究期間でしたが、分量が多いので今年も研究を延長しました。この発表をもって研究の終了となります。

特集2は、平戸村が八千代市内で古文書の所在がわからないただ一つの村であることから研究対象村に設定しました。

私たちの総合研究では村の方々に教わりながら、古文書の把握を含めた調査研究を今年度から2年計画で始め、幸いにも古文書「富澤和子家文書」を調査することができました。

古文書の内容は『史談八千代』第33号（2008年11月刊行）に一部を掲載し、今後解読研究をさらに深めてから来年度の文化祭で展示発表を行う予定です。今回の展示発表は調査研究1年目の成果として以下のように8項目に精選した内容となっています。

### （特集1）旧大和田新田の総合研究そのⅢ

1 八千代工業団地・・・千葉県が昭和35年に『内陸工業用地造成計画』を策定し、大和田新田地区に工業団地が造成され、やがて次々と各社が操業した。その後造成された上高野と吉橋工業団地と並んで八千代町を発展させ、八千代市制施行へと地域経済発展の原動力となった。ここでは大和田新田地区の工業団地に進出した企業の生産様相を細かに分析している。大和田新田で操業して約40年、市勢発展とともに生産に励まれた事業所の足跡が満載されている。

2 「白井富美子家文書」解読研究成果・・・足掛け2年にわたる解読研究の成果で、名主善兵衛の村政や特色ある文書を展示する。

3 大教院・・・吉橋大師第32番札所は現在、大和田新田下区公会堂に遷座している。

4 大和田新田今昔・・・大和田新田の総合研究の締めくくりとして、大和田新田の変貌が激しい地点をいくつか選び、約20年前と現状とを写真で比較展示する。

### （特集2）旧平戸村の総合研究・そのⅠ

1 平戸村の紹介・・・平戸は印旛沼の最西端にあり、古くから交通の要路で、印旛沼開発のための水を落とす堀割の基点であった。明治時代中期の銅版画「印旛八景」には「旧堀割」（本誌表紙）とある。村の特徴を手短かに案内する。

2 平戸の地名・・・大字平戸とその中の小字を歴史学・地誌学・自然科学の角度から解明する。

3 石造物・・・平戸の台地の一角には石造物が集積されている。その有様の特色。

4 平戸地域の遺跡の概要と平戸台8号墳・・・新県道建設に伴う道地遺跡の埋蔵文化財発掘調査では、旧石器や弥生時代、古墳～奈良時代の住居址などが明らかになった。そしてこの夏、平戸台8号古墳が完全な形で発掘調査され、人骨・副葬品などが検出された。これら、8号墳の報告を中心に遺跡の概要を展示する。

5 民俗行事「お釈迦講」と「大川施餓鬼」・・・平戸は日蓮宗のムラ、日蓮宗の行事「神保組千部講」や、今年当番の平戸東照寺による「大川施餓鬼」が盛大に行われた。またムラの女人講に匹敵する「お釈迦講」の様子も展示する。

6 平戸村の屋敷氏神・・・ムラの家には家と生業を守る大切な屋敷氏神が祀られている。各家ごとに調査し、ムラ全体の祭神を把握している。

7 戦争関係遺跡・・・軍馬頭観世音・・・日露戦争時に戦線へ徴発された愛馬の供養塔。

8 平戸からの献上米・・・勤労感謝の日に皇室では新嘗祭が行われる。神に供える新穀を毎年全国の有志が献上されている。昭和55年、平戸の中臺達雄・富枝ご夫妻が精米を献上された様子を展示する。

○ 新資料紹介・・・「島田妙泉寺の梵鐘銘文」は太平洋戦争で供出された妙泉寺の釣鐘で、供出する時の記念写真とそのとき記録した鐘の銘文が残っていた。この度、妙泉寺ご住職様のご好意により、現代史を語る貴重な史料として展示発表することができた。

○ 郷土史研活動状況・・・そして、当会の今までの研究成果と1年間の活動状況を展示しました。どうぞ気楽にお立ち寄りの上ご覧くださいませよう、会員一同お待ちしております。

## 白井富美子家文書解読研究報告

### 解読研究グループ

平成 18 年暮れ会長の発案により白井富美子家文書の横冊帳・状等 170 点の解読研究作業内容ごと各分担をし、次のリーダーを決めて発足した。

リーダー 牧野・関和 No.2～96

(大割・小割勘定帳等善兵衛組・両組)

リーダー 菅野 (大割・小割勘定帳等伊三郎組)

リーダー 畠山 No. 97～102 (地価一筆帳・状)

リーダー 滝口 No.103～125 および No.136

～170 のなかで必要なもの

以上、研究体制が決まり 19 年 1 月 11 日 第 1 回の研究作業が市立郷土博物館図書室で博物館と共同研究が開始された。

これから解読する文書は 170 点におよぶ膨大なものである。

これまで、個々の古文書にはお目にかかったことはあったが、このように白井家の祖先江戸期名主善兵衛さんが残された貴重な史料の数々を目の前にして戸惑いを感じた。とにもかくにも作業は進めなければならない。と、集まった我々は作業にとりかかった。

初めて見る文書は、江戸期の享保元年(1732)から明治 23 年(1890) の 158 年間に亘る生きた歴史であった。

名前の右衛門と左衛門、何兵衛、何郎、の区別。和数字の判断。状のくずし字の読み、等々「くずし字用例・解読辞典」「かな用例辞典」「異体字解読辞典」を引きながら、会員同士で検討を加え、教え、教えられたりしての 2 月、3 月、4 月は苦心しながらの解読作業であった。

19 年 5 月頃から、作業日を、第 1・3 週木曜日と第 2・4 週水曜日と定めて図書室から学習室に移り作業を進めた。この頃になるとようやく史料のなかばを解読し、中身が見えはじめてきたので、楽しく互いに意見交換をしながらの解読作業であった。

その研究結果を 19 年 11 月発行の『史談八千代』32 号に中間研究報告を載せることとなり「白井富美子家文書」から大和田新田の歴史を読み解くと題して、会長の序文にはじまり、続いて

「大割勘定に見る大和田新田の年貢」菅野

「小物勘定帳にみる年貢と村入用」関和

「大和田新田地価一筆帳の解説」

平塚・佐藤二郎

「大和田新田石亀沢用水溜池に係わる争い」

酒井

「土地払下げと奉公人請状」 畠山・羽計  
を発表することができた。

19 年度の解読作業に携わった延べ人数は 321 名  
総時間は 1926 時間であった。

20 年 3 月には 古文書解読作業が完了し、見直し作業を行うにことになった。

館古文書担当の野中氏から当館における解読要項の説明を受けて「白井富美子家文書解読作業要項」を作成して、作業者に配布し、それにもとづき見直しと書き直し作業を進めた。

「作業要項」は、表紙のスタイルから旧字・地名・助字・訂正・判読不明・文章の改行等々決まりがあり、これまでのほとんどの部分を書き直しとなった。このことは、これからもたずさわるであろう古文書の釈文作業に大変参考になった。

この頃になると、作業員も牧野、菅野、森山、酒井、羽計、平塚、佐藤(二)、関和と紅一点斎藤君代さんが常連となった。

この度の解読作業で、白井家文書は、横冊帳・状等 170 点が 176 点であることがわかり、その 176 点を下記のように分類した。

大割勘定帳	34	小割勘定帳・取立帳	59
地価一覧	3	状	53
		その他	27
		合計	176



解読した 70 点の「状」をさらに解釈（現代文に意識）をすることになりその作業をはじめた。

意識のため、さらに原本を見直すことで誤読、見のがし等が発見でき、解読文が精査された。

その解釈についてそれぞれの意見交換、比較検討がなされ、さらに研究の成果を深めた。

20 年 8 月 21 日 1 年 8 ヶ月に及ぶ「白井富美子家文書解読研究作業」は完了した。

20 年度の解読作業にたずさわった延べ人数は 226 名総時間は 1356 時間であった。

合計は延べ人数 552 名、総時間は 3282 時間であった。

2008. 11 (文責・関和)

## 速報レポート

### 新設された道標と問題点

#### ― 島田台と新木戸の事例報告 ―

村田 一男

「郷土史研通信第 63 夏号」（平成 20 年 8 月 24 日）5 ページに、佐久間弘文会員が速報レポートとして「島田台の題目塔道標が仮移転&新たに地中から新道標を発掘」で報告された道標についてその後の様子をお伝える。

### 報告 1 島田台

道標の位置は、睦中学校前の通称木下街道を 100 ほど北上したところ、小鈴木材店前の三叉路である。歩道部分が拡幅され、写真のように広くなった歩道用地内に題目塔道標（『八千代の道しるべ』所載の No. I-06）と、工事中に発掘された新発見の馬頭観世音道標（文政 11 年、1828 年、本誌 6 ページ参照）と台座（上部に置いた石塔はない）、石塔部分石の 4 基が新設された。



島田台 県道の歩道拡幅工事



設置された道標（左）I-06 （右）I-09

設置位置は交通事故被害を防ぐために電柱に隣接させ、角度、見易さを配慮した 8 月 20 日の現地打ち合わせどおりに施工された。

### 報告 2 新木戸

「血流地藏道」道標の位置は国道 296 号と通称木下街道が交わる新木戸交差点にある。

歩道部分の拡幅工事により、もとの位置より約 2m 内側の位置に、今春 5 月 7 日に現地打ち合わせの後、新設された。

道標は新位置に設置された。しかし道標の説明板は工事のために剥がされて使い物にならなくなったので新調しなければならなかった。

かつて説明板は貞福寺さんに費用負担していただいたので、説明板の製作と設置費用を改めて貞福寺さんをお願いしたところ、大師霊園の事務局長さんがすぐさま行動され、寺の総代会に諮って、道標の製作・設置費用を貞福寺さんが負担する、製作・設置は郷土史研で発注するようとの回答をいただいた。

説明文は従来のもとし、製作・設置は清工舎（吉橋工業団地）に発注した。さて設置するには、千葉県千葉地域整備センター管理課に「道路占用許可願」を申請して許可を得なければならなかったことが始めてわかった。

道標管理者は貞福寺大師霊園とし、八千代市教育委員会を通じて申請書を提出したが、申請と県の許可条件が合致しなかった。そこで方針を変え、以前に道標説明板を設置していただいた土地所有者と出光石油ガソリンスタンドに設置の了解を新たにいただき、私有地であるガソリンスタンド看板ポールの前に説明板を設置することができた。（⇒の写真）

なお道標の道路占用許可願は、八千代市教育委員会が行った。

新木戸のガソリンスタンドの看板前に立つ「血流地藏道標」と新説明板

11 月 10 日 牧野撮影



## 道標設置の問題点

以上は道標設置の結果報告であるが、この問題でいくつかのことを学び、道路工事に伴う問題点の確認ができた。

千葉県千葉地域整備センター維持課では管轄下にある国道・県道を整備する事業計画にあたり、「事前調査で道標などがあることを確認して工事後には元の位置に（または近くに）設置する」ことになっている。

このことを承知で事業者は工事を行い、どのように復元するか、また今回のように新発見の石造物が出たりした場合は地元や県と協議して解決することが原則である。問題は周知の道標を実際にどの位置に設置したらよいか、その地元協議とは当事者は「誰か」が問われるということである。

通常、当事者とはこの道標の管理者（または所有者）は「誰か」ということ、だいたい道標は歴史的に地域の信仰上の共同管理下にあったから、今さら管理者といわれても地域としては管理または所有者観念はないし、昔から私有地に建っていることを地主の好意で認知されてきただけである。もちろん教育委員会としても文化財に指定されていない限り実質手の打ち用がない。

地域ではたとえば、この道標は地域にとって身近な歴史遺産として共有し、文化財保存したいという地域意志が働けばたいへん幸運である。現状ではその動きはない。好意で私有地に建っていた段階から公道の歩道に道標が移動したら、もはや歴史的好意所有の庇護から脱落し、当事者はいないのである。それが「血流地藏道」道標であった。

島田台の新発見道標は予期せぬ石造物の検出であった。既存の題目塔道標ともども公道部分にあったことには変わりがないが、どの位置に設置するか協議当事者がいないことは前者と同じである。

幸いにもこの2件とも当研究会に歩道拡幅工事の連絡とどう設置したらよいかという相談があり、私は当会の市内道標の調査研究の実績に基づいて、上記の道標の当事者役を勤めさせていただいた。道標設置上の問題点解決には八千代市教育委員会の文化財班担当者と緊密に連絡をとり、千葉県地域整備センターの担当者と連絡をとってもらい、現地では県・市・事業者と私の4者で立会い、設置方法について協議し実行していただいた。おかげさまで意志の疎通を図りながらどなたもよく動いてくださり、大変良い形で道標設置を完了することができた。

このように今回の道標設置は県の千葉地域整備センターと工事業者、八千代市教育委員会文化財班、八千代市郷土歴史研究会、それに血流地藏道標では貞福寺大師霊園、土地所有者・出光石油の方々にご協力いただき協働して問題を解決することができた。

しかし血流地藏道の説明板を道標と並んで歩道上に建てることはかなわなかった。

関係各位にここから感謝を申し上げます。

## 地域文化保存論

最後に今回の道標設置の件は、基本的には当事者管理者のいない石造物をいかに地域で保存していくかの問題である。これら石造物をすべて文化財に指定して保存という方法もあろうが、本質的には地域の手によって身の回りの文化財を自分たちの手で地域のために遺していこうという文化的受け皿が醸成されることが必要である。

地域における主体的な道標保存行為の実例としては、「坪井町会」（船橋市）が整備したA-05・A-06（大和田新田の高本入り口十字路）、島田台の自治会が整備したI-03（船橋市鈴身町への分岐点十字路）がある（番号はいずれも『八千代の道しるべ』による）。

この例は公道上に道標と説明板が立てられたわけではなく、これがもう一つの問題である。その地域の文化財として周知され末永く伝えられるためには、公道上に道標と説明板が一体となって立てられることに意味がある。このような課題に私どもの団体がどのように対処していくかまた新たな課題である。

そこで当会員のみなさま、思い出すでしょう。4月の年度総会で行った「市長対話」で市長さんが「石造物などを地域の文化財として遺していくにはその制度づくりが必要である」といわれたのは、地域の手で文化財として遺す文化的状況を醸成できるように行政が働きかけを行う必要があるということであると思います。

さて今回の道標設置問題は当会にとっても大変意義のあることでありました。当研究会が郷土の歴史を学び調査研究した成果をもとに、少しでも地域のお役に立ち、貴重な文化遺産である道標という石造文化財を末永く残すことに貢献することができたことは大きな喜びであり、いわば調査研究活動の社会的帰結と自負し、今後とも調査研究活動に邁進いたしましょう。

## おたきさん道道標の現在

牧野光男

おたきさん道にある道標のうち、西八千代北部地区の開発地域にある道標の現在の報告である。この地域は東葉鉄道線が開通してから大きく変化しつつある地域で、独立行政法人都市再生機構が開発工事に入っている地域である。緑ガ丘駅北口広場から北西へ延びるおたきさん道（現歩行者専用道路）を行くと木下街道の交差点に出る。この向こう側の床屋さんの前に「二十三夜」と正面に刻む道標（A-04）がある。位置はそのままであるが、劣化が進んでいるのは排気ガスの増加であろうか。「西高本かまがや」の銘のある方向がおたきさん道である。坂を降りて登りにかかり、450mほど行くと変則十字路になりその角に「むこうにゆけばさくらミち」で知られる道標（A-05・A-06）がある。



A-05・A-06 道標

最近立派な基壇の上に鎮座する姿になった。隣に建つ説明板には「坪井町会」とある。なぜ坪井町会なのかという疑問が残るが、きれいになったことは喜ばしい。以前は藪の中で頭が少し出ているような状態もあった。この庚申塔のレプリカは現在佐倉にある国立歴史民俗博物館第3展示室の目立つところに展示されている。

ここから右の方（北）へ約500mほど行くと左へ入る道の向こう角に「愛染明王」と刻む道標（A-07）があるが、右上の現況写真のような状況になっている。愛染の「愛」と種子の一部が残っているが何時まで持つかと、危ぶまれる状況である。足元の破片は剥げ落ちたもので、並べてみたが揃わなかった。

道標を右にして先へ進むと、左側は埋蔵文化財の調査中である。

道はT字路になり右は八千代養護学校、左へ進むと左の墓地の前に大師道道標（A-08）があったが、右に折れた道の向こう側の草むらの中に移動していた。関心がなければまったく気がつかない。

それぞれの役目は終わっているが、かつての歴史を伝えている存在である。大切にされて残されてもいいのではないかと思う。

以上見てきたように、時の経過とともにその所は姿を変えつつある。姿の見えない歴史を伝えるものとして、何とか元の所かその近くにでも残してほしいと望むのは無理なことだろうか？



「愛染明王」と刻む道標（A-07）  
愛染の「愛」と種子の一部が残っている

### 新発見・道標データの追加

#### H-09

- ・記念道標 ・角柱型 ・文字碑
- ・正面「東 阿蘇村佐倉方面」
- ・右面「昭和六年（1931）三月  
歩兵中尉中臺鴻亮除隊記念 平戸口」
- ・左面「是ヨリ二丁 南睦村役場學校  
北船橋木下街道 至」
- ・裏面「神崎船尾ヲ経テ木下方面」
- ・平戸942 近辺路傍

#### H-10

- ・記念道標 ・角柱型 ・文字碑
- ・正面「→習志野船橋方面 / ←船穂村木下方面」
- ・左面「→真木野 白井方面 / ←□□□ 佐倉方面」
- ・右面「→ / ←（刻字なし）」
- ・裏面「昭和六年（1931）三月 平戸村青年團  
歩兵少尉中臺鴻亮除隊記念」
- ・平戸942 近辺路傍

#### I-09

- ・供養塔（馬頭観世音） ・駒型 ・文字碑
- ・「馬頭観世音 文政十一子年（1828）六月吉日  
世話人 人名6名」
- ・島田台1296 小鈴木材店前三叉路  
（報告・佐久間）

#### E-20

- ・庚申塔（庚申） ・駒型 ・文字碑（日月）
- ・正面「庚申塔 下高野講中」
- ・右面「北 米本いなり道 / 東先崎青菅道」
- ・左面「西 米本城橋道  
昭和十五年（1940）三月吉日」
- ・下高野仲新山342-1 末広自動車向かい側  
（発見者・天野 報告・佐久間）

ことぶ  
間宮士信書簡の謎  
なぞ  
島山 隆

高津山観音寺文書目録（『史談八千代』第30号P2掲載）の中に間宮士信の1通の書簡があります。年代は明らかではありませんが書簡の宛先は「正斎先生」とあり、士信の師であるか、あるいは私淑していた人物であることがわかります。

間宮士信は、幕府の地誌編纂事業に携わり昌平饗で林大学頭に師事していましたので、「正斎先生」とは、はじめは林大学頭ではないかと思っていたのですが、士信が師事したのは林衡（述斎）であり、また代々林家には正斎を名乗った人物は見当たらず、かねがねそのことに疑問を抱いておりました。

でも最近になって正斎の号を名乗っていた人物が、士信の近辺に居たことを知り、また実際に交流があった事実も確認することができましたので、今ではその人物にほぼ間違いのない思うようになりました。

その人物とは、北方探検家として知られる近藤重蔵です。重蔵は通称名で本名は守重、号を正斎と称しました。重蔵は、幕府御先手組与力から身を興し、長崎奉行手付、支配勘定方へと出世し、寛政年間には自ら意見書を提出して北方領土調査のため蝦夷地に渡り、樺太から千島列島を探検、択捉島（エトロフ）には「大日本恵土呂府」の標木を建てました。その後江戸城紅葉山文庫の書物奉行、大坂弓奉行などを勤めています。重蔵は幼い時から神童と言われ、8歳で四書五経を誦んじ、17歳で同志と白山義塾を開く程の学才でしたが、余りにもその才に秀で、時に傲慢とみられる行動を示したために、のちに怒りを買って左遷され、また差控え処分を余儀なくされました。さらに晩年は長男富蔵が起こした殺人事件に連座して他藩預けの身となったまま波乱に満ちた一生を終えました。

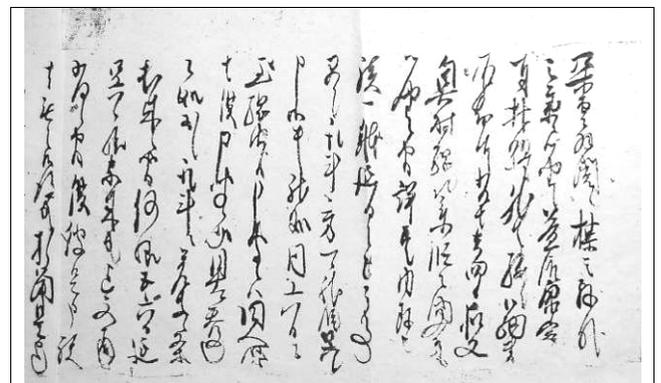
その近藤重蔵と間宮士信の交流を示す文献として、京都大学文学部古文書室に「近藤正斎宛書簡」写本があります。この写本は重蔵に宛てた書状を書写して一冊としたものですが、その中に林述斎・藤井貞幹・古川古松軒等と並んで間宮士信の書簡が混じっていることがわかりました。このことは、高津観音寺の間宮士信公資料集に「間宮士信の新史料」をお書きになった鈴木圭吾先生から最近伺ったことです。

近藤重蔵は間宮士信よりは6歳年長で儒学者で

あり、また探検家として早くから地誌を編纂した先学者としての共通項があり、立場こそ違えお互い接触があったとしても不思議ではありません。ことに重蔵が紅葉山文庫の書物奉行として最も充実して仕事に取り組んでいた文化5年から文政2年にかけての11年間は、士信がまた昌平饗にあって、地誌調方頭取として『新編武蔵風土記稿』の編纂に本格的取組みを始めた時期でもあり、その時既に北方領土の探検から帰っていた近藤重蔵に対し、士信が種々教えを請うたことは十分考えられます。この当時紅葉山文庫と昌平饗は、幕府が収集していた和漢書の二大集積庫であり、距離的にもきわめて近かったことも交流のあった可能性を十分に窺うことができます。

ところで観音寺に現存する士信の書簡は、崩し字が難解で未だ完全に解読できないでいますが、書簡の凡その内容は、約束していた会合の日取りを士信側の都合で日延べすることについての謝罪と、今後の段取りに関する事柄がつつづられています。

疑問に残るのは、なぜこの書簡が高津山観音寺に残されていたのかという謎です。士信は、仕官した当初から江戸に在住していましたので、唯一考えられるのは、士信が高津村の領主として、文化11年（1814）5月に皇秀霊神二百年忌法要のため高津村を訪れていることです。つまり、この書簡は二百年忌法要の前後に書かれたもので、観音寺の二百年忌法要に訪れた士信が、手許にあった正斎先生宛書簡（控えか？）をうっかり置き忘れて帰ってしまったと推理するより外ないのです。そのように考えると、この書簡は前記の京都大学古文書室にある「近藤正斎宛書簡」の中にあつた方が収まりのよい文書のように思われるのですが、それはさておき今後なお機会があればその謎解きを進めてみたいと思います。



## ＝お知らせ＝

12月12日（金）

東京成徳大学特別講義

「地域研究から見える歴史」

とき＝10:40～12:10

- ・八千代市郷土歴史研究会の紹介：村田一男
  - ・「八千代の俳諧文化」：関和時男
  - ・「明治維新の近代曙に生きた佐倉藩士小柴宣雄」：畠山隆
  - ・「古文書に見る名主善兵衛の村政」：菅野貞男
- ・聴講希望者は村田、または東京成徳大学  
Tel:047-488-7111（代表）まで

12月例会

12月14日（日）

集合時間＝13:30

場所＝東葉線八千代緑ヶ丘駅改札口

- ・「大和田新田の今昔」のポイントを見て回ります。終了後は、恒例の忘年会です。

### 目黒七福神もうで

初春 2009年1月7日（水）

集合時間＝10:00

場所＝都営三田線 白金高輪駅1番出口

（勝田台駅8・36 発西馬込行に乗車

三田駅で三田線に乗り換えが便利）

江戸時代から由緒ある山手七福神。

虎退治の清正公さまから、目黒のお不動さんまで、途中、大円寺で開帳されているお釈迦様\*を、拝み、また道筋にある石造物などを訪ねながら、初春の一日を歩きませんか。

\*大円寺の釈迦像は、村上の正覚寺釈迦堂に安置されている清涼寺式釈迦如来立像と同じ様式の立像です。

・**コース** 覚林寺・・・瑞聖寺・・・妙円寺・・・大円寺・・・大鳥神社（昼食休憩）・・・蟠龍寺・・・海福寺・・・五百羅漢寺・・・成就院・・・安養院・・・滝泉寺（15:30）解散予定

・参加の方は、12月例会までにお申し込みください。会員以外の方も歓迎（会費500円）

2月例会

2月15日（日）

とき＝13:30～16:00

ところ＝八千代市郷土博物館学習室

旧家の仏壇にあった

「千葉縣印旛郡阿蘇村栗谷古墳」論文

藤 由美

この夏、「平戸台8号墳」調査を追っかけながら、この古墳の特徴である「後期群集墳・板石組合せ箱式石棺・追葬」、そして市毛勲氏の言ういわゆる「変則的古墳」（主体部が墳丘裾部にある）の類例を、古い文献で調べていくうち、「阿蘇村栗谷古墳」という文字が目飛び込んできました。

中村恵次氏の「千葉県における後期古墳—とくに群集墳の分布・内部施設被葬者について—」という1961年の論文の中に、「類例を若干あげるならば、印旛郡印旛村油作一号墳・同阿蘇村栗谷古墳・・・」と古墳名が列挙され、出典文献の註に、大川清1954「千葉縣印旛郡阿蘇村栗谷古墳」『古代』第11号とあります。さっそく大川氏の論文を探してもらって見ると、戦時中の開墾により封土が削られた栗谷古墳は、戦後すぐの調査で、緑泥雲母片岩を組合せた箱式石棺であり、内部から長刀3口刀子3口、鉄鏃若干、玉類のほか、人骨が2人以上検出されていることなどが詳細に記述されていました。

さてこの古墳の位置ですが、この報告には地図がなく「阿蘇郵便前を約式料ほど北進すると、道は印旛沼の岸に出るため台地上から下り坂になる。坂を下りおわると、道は東へと折れて保品の部落に通じる。この坂を下りきったところの西側に、道路から水田をへだてて標高二〇米の台地の端近く二基の古墳があり、その一基が本墳である。」と叙述されています。本会の古道調査の際の経験で、たぶん東京成徳大学の前の坂を下りきった神野入口の左手台地、老人ホーム「八千代城」付近ではないかと類推しましたが、地形が変わっていて確定できません。

例会でこの論文を披露したところ、田宮会員が知人の「八千代城」旧地権者の方の家を訪ね、ホーム敷地の左端あたりで間違いのないことを確認してくださいました。そしてこの家の奥様が「先代が調査の記念にと仏壇の下にしまってあった資料がある」と見せてくださったのは、まさしく1954年の大川清氏の論文であり、幼少時の記憶から古墳のあった場所を私にお教えくださいました。

『八千代市の歴史』（1979）の遺跡一覧表に「保品栗谷古墳」とあるこの古墳、今回の「平戸台8号墳」の調査結果とともに、幻だったこの古墳の詳細な内容と位置を知ることができうれしく思いました。

＝編集後記＝

「道標」を含め、路傍の未指定未登録の文化財を誰がどう守っていくのか。今号は、本会の平成12年度プロジェクト「道標研究」の「その後」に迫る重要な現況レポートをいただきました。皆様からの実例報告と、地域の手で文化財を遺すという文化的受け皿の醸成が課題という会長の提言は、「地域文化保存論」として全国に発信するに値する貴重な内容だと感じます。

＝編集担当（藤）[sawarabi-y@nifty.com](mailto:sawarabi-y@nifty.com)＝